

職業の選択

—パスカルの「パンセ」において—

「一生のうちで最も大事なことは、職業の選択である。
偶然が、それを決定する」 「パンセ」ブランシュヴィック版97

村瀬 勉、田中 萬年

目 次

1. はじめに
2. パスカル
 - a. 家 系
 - b. 年 譜
 - c. 17世紀のフランス
3. パンセ
 - a. 「パンセ」とは
 - b. 「職業の選択」の句
 - c. 「職業」に関連する語
 - d. モンテーニュ「随想録」との比較
4. 偶 然
5. 恩寵、選択
6. 父、エティエンヌ
7. 「働く人」パスカル
8. おわりに
 - 謝 辞
 - 参考文献

1. はじめに

私たちは、人間として生きるために食べ、そのために働き生活費を得ている。さらに、生き、働き、その質を高めるには絶えず学ぶことが必要となる（田中 2002）。

夏目漱石（1867-1916）の小説を読んで疑問に思うことは、主人公たちはどうやって生活しているのだろうかということである。「彼岸過迄」の敬太郎は大学は出たが就職できない。須永は自分のしたい仕事がない。「それから」の代助は、職業を持たず月に一度は実業家の父に生活費を貰うといった状態である。他の作品でも同じような人物が登場する。

漱石は、これら「高等遊民」によって現代日本の社会と文明を批判したが、内田（1868-1929）（1984）は、「国に遊民のあるは決して憂うに足らぬ。これあるは其の国の余裕を示す所以…」と評価した。

明治は遠い。現在の若者にそのような余裕はない。若者の実態は多様化し、フリーターの数は、1982年（50万人）、1987年（79万人）、1992年（101万人）、1997年（150万人）、2003年には417万人を越えるという。長山（2003）は、自身「オタク」として職業選択に際し違和感を抱いた経験を通し、労働観を切り口に、「決められない若者たち」を分析した。

私たちは、自分自身がどうして今の職業を選んだかを振り返ってみると必ずしも明確には云えない。誰かに聞かれても「偶々ですよ」と答えしてしまう。しかし、全く考えなかったわけではない。

人によって年齢は違うが、中学を終える頃になると何か漠然と将来のことを考え、高校へ、あるいは大学へ、そして就職。どうやって生きていこうかと考える。そのとき、好きなことをやって生活できればよいなあと願う。つまり、その時、自分はどのような職業が好きかを考える。それなりの理由づけをして「あれは嫌だ、これも嫌だ」と消去していくこともある。子供の時からの経験を通して、何らかの動機、また何かをしたい、しなければならないという要求ができあがる。

つぎに「好きだが、それに見合う才能があるか」「自分の性格に合っているか」と自己診断をし、「進学するならば、家庭の経済は許すか」と次第に現実味を帯びてくる。

つまるところ、その職業で食っていけるかということになり、迷いに迷い、妥協に妥協を重ねて「職業を選択」することになる。

ホランド (Holland, 1985) は、われわれ人間の特徴を、現実的、研究的、芸術的、社会的、企業的、及び慣習的の6要素で説明できるとして、パースナリティと環境、あるいはそれらの相互作用の心理学的類似性を定義するために六角形モデルを設定し人間の職業行動を分析した。また、アメリカ人だけではなく、日本人にも適用し驚くほど類似の結果が得られている (ホランドの訳：渡辺、松本、館：1990)。

この理論は、確かに職業を選択するとき、自己のパースナリティと環境から一定の目標を設定するために有効であろう。しかし、最終的な選択の決断はどうするのであろうか。「選択」の前で戸惑うばかりである。

この時、「職業」・「仕事」・「労働」などの言葉を多用して、人間を現実の日常生活の中において分析し、個々の人間を観察すると同時に、自己の内部を直視し、自己を探求し続けたパスカルに、この問題を問うてみた。彼はその「パンセ」のなかで言う、「一生のうちで最も大事なことは、職業の選択である」。そして、ついで言う。「偶然が、それを決定する」と。パスカルを知る者は、この答えに疑問を持たないだろうか。彼はアウグスティヌスの「恩寵」の流れを汲むキリスト者である。ならば、むしろ「職業の選択は恩寵による」と書き残すべきではなかったか。これは問題である。

本稿は、「パスカル」、およびその「パンセ」の解説を通して、この問題を考察し、その背景にある「働く人」に対するパスカルの意識を指摘しようとするものである。

パスカルとはどのような人なのか。まずそこから始めよう。

2. パスカル

a. 家系

台風の際、「ヘクトパスカル」という言葉を絶えず聞かされる。ミリバールに代わって登場した気圧の単位で1パスカルの100倍である。さらに、コンピュータのプログラミング言語にも「パスカル」という言葉がある。「パスカル」とは何であろうか。それは人の名前であり、「パスカルの原理」で有名な大気圧・液体圧に関して思考し、実験を行い、また初めて計算機を設計、製作した物理学者、数学者である。

ある人は、「人間はひと茎の葦にすぎない。自然のなかで最も弱いものである。だが、それは考える葦である」という言葉からモラリストとして(前田 1968、三木 1926)、あるいは実存の概念では表現しなかったが、実存の問題を提供した実存主義の祖といわれる哲学者として(松浪 1962)、さらに、ある人は恩寵論論争のキリスト者として知っている。

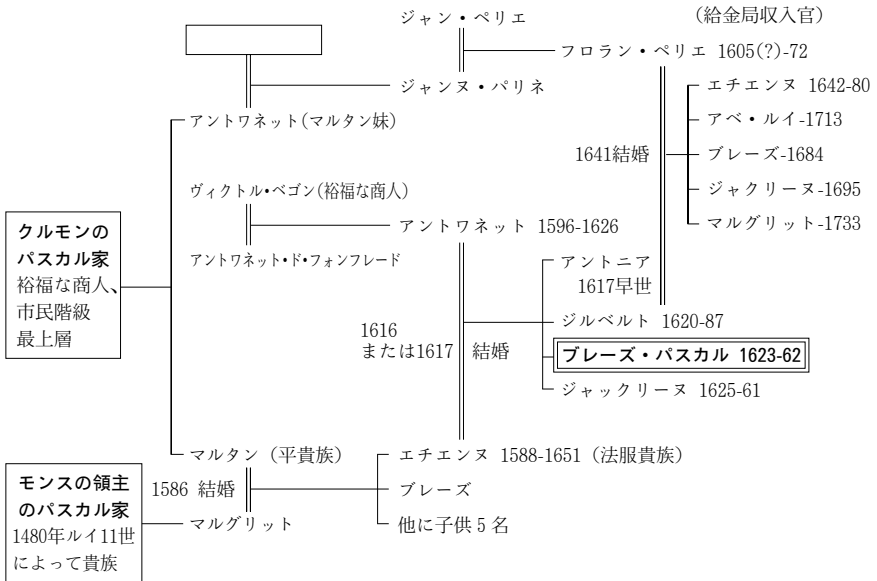
そのブレーズ・パスカルは、1623年6月19日、フランスのクレルモンで生まれ、1662年8月19日パリで没した。39年3ヶ月の生涯であった。

彼は1歳か2歳の時、腸結核の一種と考えられる病気の徴候を示しはじめた。そして生涯「眼性偏頭痛」に悩まされ、死病となったのは、全身に転移した癌、最近の診断では、慢性の腎機能不全に脳腫瘍の併発があったといわれている(メナール 1971、田辺 1999)。

パスカルと名乗る家系は二つあった(図表1)。全く別の血統で、一つはモンスの領主を代々勤め、1480年にルイ11世によって貴族となった。他の一つは、リマーニュのクルノン出身で裕福な商人の家系である。両パスカルは、1586年、モンスのマルグリットがマルタン・パスカルと結婚して姻戚関係となった。マルタンは人頭税徴税官、書記官、枢密顧問官などの官職によって貴族になり、長男エチエンヌ、すなわちブレーズ・パスカルの父は、パリで法律を学び、のちに租税法院の院長に任ぜられ、その功によって貴族に列せられた。彼は1616年頃、裕福な商人の娘、ア

ントワネット・ベゴンと結婚して一男三女があり、一男がブレイズ・パスカルであり、父の弟と同名である。

図表1. 家系図



(注) 法服貴族：封建君主に仕え、爵位を持つ世襲貴族ではない。名前の由来は、重要な官職についた市民階級の上層の出身者が、新しい貴族扱いを受け、裁判所や税務職員などの制服である「法服」を着た者が多かったことによる。17世紀初め、財政困難になった旧貴族や王家は、裕福なブルジョワに「売官制度」で官職を売り収入を得た。ブルジョワも高い社会的地位、荣誉、利益は魅力であったので競って購入した。

b. 年 譜

次の図表2にパスカルの年譜を示した。従来の年譜では、彼の多面性が羅列、混在している。本稿では、多面性を鮮明にするため数学者・物理学者とモラリスト・キリスト者に分けて記載した。

図表 2. パスカルの年譜

年齢	家族との関係事項	科学者（数学者・物理学者）としての事項	モラリスト・キリスト者としての事項	補 足
	1623/6/19 ブレーズ・パスカル、フランス、オーヴェルニュ州、クレルモン＝フェランで誕生。6/27出生地のサン・ピエール教会で洗礼を受ける。父、エティエンヌは地区徴税官。			1623 父、エティエンヌの職業はクレルモン地区徴税官（人頭税、塩税などの税務関係のことを裁いた）。翌年、モンフェラン租税院副院長の職を購う。
2	1625 妹、ジャックリーヌ誕生			
3	1626 母、アントワネット没			
8	1631 バリに移住。			1631 父、弟に職を売り官職から身を引き科学の研究と子供の教育に専念。
11		1634 音響の実験観察の結果をまとめた。		1634 ガリレイに有罪宣告。デカルト「宇宙論」の公刊を断念。
12		1635 ユークリッドの定理第32まで独力でたどりつく。科学アカデミー列席。		1635 メルセンヌを中心とする自然学者による「メルセンヌ・アカデミー」始まる。
13				1636～37 手工業者、農民の反乱が各地で起こる。地方総監制が全国的に実施、中央集権化が一層強化。
14				1637 デカルト「方法序説および試論」を公刊。
15	1638/3/26 バリ市債の利子切り下げに父が反対し抗議に荷担したため投獄される危険を感じオーヴェルニュに逃れる。			1638/5/6 ジャンセニウス没。
16	1639 妹、ジャックリーヌの嘆願で父許され徴税担当の地方総監、ルーアンへ。			1639 ルーアンでは反租税の暴動が繰り返され、政府は弾圧的な鎮圧につとめた。
17		1640 パスカル16歳の作「円錐曲線試論」印刷。また父の徴税の仕事を手伝い、その労を軽減するため計算機制作を思いつく。		1640 ジャンセニウスの遺書「アウグスティヌス」刊行。翌年、宗教裁判所により異端宣告。
18	1641 姉ジルベルト、ペリエと結婚。			1641 デカルト「省察」刊行。
19		1642～44 計算機制作開発に職人と共に没頭、健康を害す。		1642 リシュリユ没。ガリレオ没。ニュートン誕生～1727。
20				1643 トリチェリ真空の実験。
21				1644 デカルト「哲学原理」刊行。
23		1646 父の友人がトリチェリ「真空に関する実験」の情報を伝える。実験用具を作らせ「実験」の再現成功。	1646 父の怪我が契機となり一家をあげてジャンセニズムの信仰に入る。パスカル「最初の回心」	
24	1647 春、病床につく。夏、パリに帰。妹、修道院入り決意。パスカルは賛成するが父は反対。	1647/9/23.24 デカルト見舞いに訪問、真空の問題について話あう。10月「真空に関する新実験」刊行。11月 義兄ペリエに山麓と頂上での「真空実験」を依頼。	1647 カプチン会修道士の、理性によって信仰の秘儀を論証できるという異端説を取り消させる。年末に妹とパリのボール・ロワイヤルを訪れ、サン・グランの説教を聞く。	
25	1648/7 地方総監制度廃止。父、職を解かれパリに帰る。	1948「円錐曲線」を完成。9/19義兄、ペリエ、ビュイ・ド・ドームの山頂で気圧の予想通り。9～10月パスカル自身パリのサン・ジャック塔で真空実験。10月「流体の平衡に関する大実験談」	1648 姉、ジルベルトにあて、信仰観を披瀝する手紙をしばしば書く。	1648 夏、「高等法院のフロンドの乱」起こる。リシュリユは新教徒の反抗を根絶し、中央集権に成功。新秩序は、伝統的な封建貴族ではなく、貴族の下層と市民の上層とからなる官僚貴族が担ったが、旧貴族と新政府に従順でない官僚貴族がリシュリユの死後1649年から1653年に反乱を起こした。
26	1649/5「フロンドの乱」を避けクレルモンのペリエ家に滞在。	1649/5/22 計算機製造に関する国王の特許状を得る。		
27	1650 11月パリへ帰る。			1650/2/11 デカルト没。
28	1651/9/24 父、没。遺産のことで妹と争う。	1651「真空論序説」完成と推測される。		

年齢	家族との関係事項	科学者（数学者・物理学者）としての事項	モラリスト・キリスト者としての事項	補 足
29	1652 妹、修道女院に入る。	1652 スウェーデン女王に計算機献呈の手紙を書く。	1652 社交界に出入りし、自由思想家と接触、「世俗時代」の始まり。	1652 バリ高等法院派は旧貴族層と分裂、上層商人層と結んで王権擁護側にまわり、「旧貴族のフロンド」は敗退し、王室はバリに帰還する。
30		1653 「流体の平衡について」「大気の重さについて」の2論文を執筆（死後1665年出版）ルアネ公爵の干拓事業に株を購入するなど協力する。		1653 手工業者たちによる共和主義的な「民衆のフロンド」解体。
31		1654 バリのアカデミーあてに数学上の研究計画を書き送る。蓋然性の問題に興味を持ち始める。夏、「算術三角形論」	1654/9 俗世間に対する嫌悪を感じるようになり、禁欲的、宗教的態度に戻り、たびたび妹を修道院に訪れ、心境を訴える。11/23 恩寵の「火」を経験。決定的回心。この時の「メモリアル」を羊皮紙に書き、死ぬまで胴衣の裏に縫い込む。	
32			1655/1 ポール・ロワイヤル・デ・シャンにしばらく滞在。ド・ザシ氏と対話し、「エビクテートス」とモンテニューについてのド・サン氏との対話」執筆。	1655 このころから、ポール・ロワイヤル派（ジャンセニスト）とイエズス会（ジェズイット）との対立は一層激化。
33			1656 パスカルもジェズイットとの論争の高中に巻き込まれ、ジェズイットを弾劾する公開状を執筆。1/23 「プロヴァンシャル」第一の手紙。翌年3/24までに18の手紙を発表する。3/24 「聖薊の奇跡」がおこる。	
34		1657 ポール・ロワイヤルの学校のために「幾何学の原理」	1657 「恩寵文書」1657～1658の2年間に「パンセ」の大部分を執筆と推定される。	
35		1658/6 「サイクロイドについての第一の回状」	1658/5 ポール・ロワイヤルで、キリスト教弁証論の著作の意図と構造について講演。	後にフィヨール・ド・ラ・シェーズがこのときの講演筆記その他を調べて、「パスカルのパンセについて」(1672出版)執筆。
36	1659/3 病状急速に悪化。	1659/1 ホイヘンスに数学上の手紙を書く。	1659 「病気の善用を求める祈り」「要約キリスト伝」執筆か。	1659 スピノザ「神・人間の幸福に関する短論文」を書く。
37	1660/5～9 故郷クレルモンに転地。10月バリに帰る。	1660/8 フェルマへ手紙を書く。	1660 「大貴族の身分についての3つの講話」10/14 「プロヴァンシャル」のラテン語訳、バリで焚書	1660 ルイ14世ジェズイットとジャンセニストの論争に介入。
38	1661/10/4 妹、ジャクリヌ没。		1661/10/31 信仰問題と事実問題との区別なく、無条件に「信仰宣誓文」に署名することを命ずる布告が出される。パスカルは反対し、考えは容れられず論争から身をひく。	1661 ポール・ロワイヤルへの弾圧が厳しくなる。2月ジャンセニウスを異端と認める信仰宣誓文に署名するよう全聖職者に要求する布告が出される。ポール・ロワイヤルの学校閉鎖。
39	1662/6 病状急激に悪化。6月末ベリエ家で看護。7/4 教区司祭を招き、聖体拝受を願う。8/3 遺言状作成。17日終油の秘蹟。「主よ、われを見捨てなうなかれ」が最後の言葉であった。19日午前1時没。39歳3カ月の生涯であった。		1662/1 パスカルの「乗り合い馬車」の計画に国王許可。3/18 バリに初めて乗合馬車が走る。収益の殆ど全てを慈善事業に捧げる。その頃、貧しい不幸な人々に対する愛と奉仕だけを欲し、愛のわざに励むよう勧める。	

この年譜を見ると、パスカルの死後、姉ジルベルト・ペリエが書いた「パスカルの生涯」(1684)において、弟、ブレーズは回心後、「イエス・キリストが必要な唯一のものと仰せられたものに専念するために、そのとき以来、他のすべての学問研究を放棄した」と言っているが、実際は科学者としての活動を続けていることが分かる(メナール 1967)。

パスカルは「烈しい人間」の生き方を過ごした。それは17世紀前半特有の烈しさであり、父や妹にも共通して見られるものである。彼は書齋や修道院に閉じこもる人ではなく、旅をする人であり、行動する人であった。そのことは、大気圧実験のデモンストレーション、計算機の製作とその特許状の取得、沼地干拓事業への参加、ある貴公子の教育計画、パリでは乗合馬車会社の設立などに見られる通りである。

この烈しい生活は、しばしば、他人を支配しようとする傲慢さとなった。科学者としての才能の自信が、どのような矛盾をも認めず、人々の精神をも支配したいという欲求は反対者を容赦なく攻撃した。そして家族に対する強い愛情は独占的で自己本位の愛情となった。妹ジャックリーヌの修道院入りへの反対は姉ジルベルトが証言するところである。

しかし、表現を変えれば、パスカルは情熱的な人間である。大きな着想が次々に湧き出てくる。思慮深く、視野が広く、大胆である。と同時に、生まれながら、現実にも密着していて事物との密接な接触がその論理的思索の土台になっている。

このように、パスカルは、およそロマンチックの精神めいたものから遠い人であった。幼い日に母を亡くしたことによる対母親コンプレックス—傷つきやすく、激しやすい、ひ弱な男の子のイメージは、彼には無縁で、リアリストであった(グアルディーニ 1957、田辺 1967)。

では、リアリストとしてのパスカルの意味は何であったのか。彼が書き残した「パンセ」について次に述べる前にパスカルが生きた17世紀のフランスについて簡単に触れておこう。

c. 17世紀のフランス

パスカルが生きた17世紀、ついで18世紀のヨーロッパは、美術、音楽、文学、哲学において古典的時代と云われ、政治思想は王権神授説、近代自然法、社会契約説、啓蒙思想へと移り変わっていった時代であり、自然科学においては教会の権威からの脱却と自然界の研究により、科学的知識が急速に進歩した時代であった（中村 1965）。**図表 3** にパスカルと同時代に生き、活躍した人々の生涯を示した。

デカルトは近世思想の方向づけを行って、ヨーロッパの思想家、自然科学者に刺激を与え、スピノザ、ライプニッツ、ロックがそれぞれの哲学を生み出した。その中であってパスカルの遺稿は畏敬をもって読まれ、読んだ者に多くのインスピレーションを与えた。しかし、彼の思想が必ずしも受け入れられたわけではなかった（伊藤 1969）。

たとえば、18世紀の啓蒙思想家の多くは、アンチパスカルであり、ヴォルテールは「哲学書簡(1734)」で、「パンセ」の精神は「人間を醜悪な面において示すことにあった」と非難した。20世紀では、「節度と秩序」を重視するヴァレリーは「『瞑想』の一句を繞りて」（1924）において、「パスカルは無限の空間から、沈黙しか受け取らない。彼は自ら『脅かされた』と云う。この世界から見捨てられたことを傷ましく嘆き」「自分を追いつめる」と非難する。しかし、デカルトなしにパスカルはあり得ず、自分自身の中のデカルトと格闘した（伊藤 2000）。

さらに、パスカルは現実に17世紀フランスに生きた人間であることを考慮しなければならない。その時代、その社会の文化的なコンテクストの中であって思索をし、著述を進めた。当然ながら、時代意識の反映もあり、当時の社会慣習にも縛られていた。カトリック・キリスト教が唯一といってよい宗教であり、ほとんどすべての国民が生まれるとすぐに幼児洗礼を受けられ、死ぬ時は教会で葬儀をされるのが常識であり、自明の理であった風土で生涯を過ごしたのである（田辺 2002）。

図表 3. 17世紀ヨーロッパで活躍した人々の生涯

	西暦年	1550	1600	1650	1700
美術	ルーベンス		1577	1640	
	ベラスケス		1599	1660	
	レンブラント		1606	1669	
音楽	ヴィヴァルディ			1678	
	バッハ			1685	
	ヘンデル			1685	
文学	リエール		1622	1673	
	ルトン		1608	1674	
	デフォー			1660	
思想 哲学	ベーコン	1561		1626	
	デカルト		1596	1650	
	パスカル			1623	1662
	ロック			1632	1704
	スピノザ			1632	1677
	ライプニッツ			1646	
政治思想	ボッシュエ			1627	
	ロック			1632	
	モンテスキュー				1689
	ヴォルテール				1694
自然科学	ハーヴェー	1578		1657	
	ボイル			1626	1691
	ホイヘンス			1629	1695
	ニュートン			1642	

3. パンセ

a. パンセとは

1662年8月19日、パスカルがこの世を去ったとき、書斎に膨大な未完成原稿が残されていた。原稿の大部分は自筆であるが、口述して近親者に筆記させたものもある。発見されたときの状態が一冊の本として刊行

できる原稿ではなかったため300年以上にわたり多くの人によって色々な形で編集され出版されてきた（塩川 2001）。

「パンセ」を著書の形でポール・ロワイヤルが出版したのは、パスカルの死後8年経った1670年であり、題名は次の通りである。

「死後、書類の中から見出された、宗教及び他の若干の主題に関するパスカル氏の断想（パンセ）」（フランス語の原題は参考文献参照）

パスカルの意図が「キリスト教護教論」であり、その構想がシナリオの形で残されたことは確認されているが、遺稿集としての「パンセ」には、護教論だけではなく多数の要素が含まれており、それが書物の問題性と価値を高めている。それらの要素を大別すれば、一方では、護教論の手前側にある世俗の人間の領域、他方では、護教論の終着点のさらに先にある信仰の領域に二分される。したがって「パンセ」は、内容的にいかなるジャンルに属するのか、また何のために読むのかということ、あらかじめ決定できない書物であるが、伝統的には4つの見方がある。

- 1) モラリスト文学として。
- 2) パスカルという傑出した個性の思索の表現、魂の告白として。
- 3) 深い宗教体験に貫かれた信仰書として。
- 4) 「キリスト教護教論」として。（塩川 2001）

この他に科学者（数学者、物理学者）としてパスカルの研究に注目する場合もある（小柳 1999）。さらに本研究で試みるパスカルの生き方の基本に「働く人」との接触、そしてパスカル自身を「働く人」として見る立場もあると思う。

b. 「職業の選択」の句

「パンセ」にある「職業選択」に関連する句を以下に示しておこう。

引用は松浪（1950、1965）（前田・由木 1966）訳および原語（フランス語、B：ブランシュヴィック版 1964）を用いた。

「職業」というフランス語の選び出しは、一つのフランス語の単語が文脈によって多義にわたるものもあるので、日本語訳と英語訳を参照して行った。なお、検索には松浪訳と前田・由木訳の索引を利用したが、すべての「職業」という語がその索引に含まれているわけではなかった。また、全く「職業」を無視した索引もあり、日本における「職業」に対する意識を垣間見たように思う。

B97 一生のうちで最も大事なことは、職業 (métier) の選択である。偶然が、それを決定する。

習慣が石工をつくり、兵士をつくり、屋根職人をつくる。「あれは立派な屋根職人だ」と或る人は云う。また兵士のことを、「奴らはばかだ」と或る人は云い、他の人は反対に「戦争ほど偉大なものはない。兵士にならない奴は、人間の屑だ」と云う。人は子供のときに、これこれの職業が称讃され、それ以外のすべての職業が軽蔑されるのをたびたび聞かされたあとで、職業を選ぶ。なぜなら、人は徳を好み、愚を嫌う性向をもっているのです。それらのことばがわれわれを動かすからである。人は適用の点で、しくじることがあるだけである。

自然の力は非常に大きいので、自然がただ人間たらしめたにすぎないものから、人はあらゆる身分の人間をつくり出した。なぜなら、或る地方では皆がみな石工であり、他の地方では皆がみな兵士であるからである。いうまでもなく、自然はそんなに一様ではない。してみると、そうさせたのは、習慣である。なぜなら、習慣は自然を束縛するからである。しかし、往々にして自然は、習慣にうちかち、あらゆる良い習慣、悪い習慣に反して、人間をその本能のうちにひきとどめる。

B116 職業。思想。— すべては一であり、すべては多である。

ひとくちに人間の本性といっても、いかに多くの本性があることか！

ひとくちに天職 (vocation) と言っても、いかに多くの天職 (職業) (vocation) があることか！しかも各人は、普通、他人がほめるのを聞いて、偶然にもそれを選ぶ。ぐあいのいい靴のかかと。

B117 靴のかかと。まあ、何て上手な職人だろう、何て大胆な兵士だろう、— そこにわれわれの好き嫌いのはじまり、職業選択 (choix des conditions) のはじまりがある。

(注) パスカルが、何故ここで「靴のかかと」という言葉を用いたかについての前田 (1980) の注解「サント・ブーズがポール・ロワヤルの隠士が手を使う仕事をあえてなし、修道尼のために靴を作ったことことを紹介している。」

B138 自分の部屋にいるとき以外には、人々は自然的に、屋根職その他あらゆる職業 (vocation) の人である。

B158 職業 (métier)。— 栄誉の魅力はかくも大きいので、その結びついているものがたとえ死であっても、人は栄誉を愛する。

以上から、職業の選択は偶然や習慣に左右される、人は徳を好み、愚を嫌うので、子供の時に賞讃される職業を選び、軽蔑されるものを選ばない。何故ならば、

B143 人々は子供の頃から、自分の名誉や財産や友人達の財産や名誉に心をつかうようにしつけられる。

からである。

パスカルは、このように人間は本当の美点より想像上の、うわべだけの美点のほうを好ましく思うものと云って、人間の「空しさ」「悲惨」さを示す。このことはモンテーニュ (1533-92) が「随想録」(関根 1955) で展開したテーマであり、両者の比較についての研究がある(前田 1949、ルゲン2000)。ここでパスカルは、下記のように「職業」によって人間に差を置かないことを指摘しておきたい。

B34 世間では詩人という看板をかかげなければ、詩に精通していると見なされない。

数学者の場合も同様である。しかし、全般的な人は、看板を欲しない。また詩人の職 (職業) (métier) と刺繍工の職 (職業) とのあいだに、ほとんど差別を置かない。

この「差別を置かない」ということをパスカルは「偶然の問題」として扱っている。すなわち、1660年にパスカルは、ある貴族の子息の教育を引き受け三つの講話を与えた。それをポール・ロワイヤルの学校でラテン語を教えていたニコル (Pierre Nichole 1625-95、パスカルの盟友で隠士) が「大貴族の身分について」と題して1660年に編纂し伝えている。その

中から関係部分を抽出すると、

「自分が現在の地位を得たのは全く偶然にほかならない。」

「あなたが今の財産をすっかり持つようになったのは、あなたを生みだした偶然と、あなたのために好都合な法律の気まぐれとが出会ったからにほかならない。」

「世には二種の高貴さがある。制度の高貴と、自然の高貴とがそれである。」

すなわち、貴族だからといって富や栄誉が自然に備わったのではなく偶然の結果であり、まわりの人々に優れたものではないことを認識しなければならず、神の前では皆等しいことを主張している。

しかし、このようにパスカルは職業に差別を置くことはなかったが、それは彼のリアリストとしての経験によってさらに強められ、後述するようにパスカルの「偶然」の意味に結びついていくと思われる。

マックス・ヴェーバーは、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(1905)でパスカルに言及し、次のように言っている。

世俗の職業生活にこのような道徳的性格をあたえたことが宗教改革の、したがってとくにルターの業績のうちで、もっとも大きかったものの一つだということは、実際疑問の余地がなく、もはや常識だと言ってよい。こうした職業観は、パスカルが瞑想的な心情から、世俗的活動の尊重を、見栄や狡猾さだけから説明できるという根深い確信にもとづいて拒否する、そうした強い嫌悪の念などとはおよそ縁遠いものだ」

しかし、後述の通りパスカルの間観、職業観はヴェーバーの理解と異なるところにある。

「職業の選択」に関する句は以上であるが、「職業」に関連した語は多数ある。それを次に示そう。

c. 「職業」に関連する語

「パンセ」には職業に関連する語が多くあり、パスカルの関心の高さを示している。それらを次の図表4にまとめた。

図表4. 「パンセ」にある「職業」に関連する語

affaire	仕事 職務 雑務	laboureur	労働者
charge	職 職務 地位 仕事	occupation	仕事 営み 熱中の 仕方
condition	職業 職務 地位 身分 状態 条件 境遇 地位 境遇 自分の職務 自分 の分		ouvrage
		ouvrier	職人
		poste	地位
emplois	職 職務 つとめ	travail	労働 勤労
métier	職 職業	vocation	天職 職業 召命

(注) 上表の vocation は5カ所あり、使命、召命。英語では vocation か calling。ドイツ語の Beruf は calling に相当し、vocation と共にヴェーバー(1905)が言及した。しかし、羽入(2002)は、ルター訳聖書には「Beruf」の語がない、と検証し批判した。

また、日本語の働く、仕事、わざなどに、また英語の work に訳されているフランス語の besogne, ouvrage, travail 等の数は多い。

「職業の選択」における「職業」のフランス語は métier と condition が使われている。両者の差異は、辞書によっては、métier は(技術で身を立てる)職、(手先の修練による)業務、仕事、職業などとしているものもある。しかし、1694年のアカデミー辞典で調べたが不明であった(YAHOO FRANCE に Dictionaire de l'Academie Francaise を入力、ARTFL dictionary collection から First Edition (1694) を選び、検索する語を入力)。前田(1985)の註には「condition は、パスカルの時代にも既に多くの意味を持ち、1694年のアカデミー辞典にも、状態、家柄、身分、職業、職務、資格、条件、待遇、行状というように、色々の定義が掲げられ、それぞれに用例が付せられている」とある。

なお、「パンセ」に現れる職種は次の通りである。

印刷人 理髪師 刺繍工 石工 屋根職人 徒弟 料理人 荷役人足(靴) 職人
幾何学者 詩人 数学者 哲学者 雄弁家 術学者 医者(国) 王 女王 宮廷人
教皇 枢機脚 司教 修道士 説教師 法官 裁判官 弁護士 軍人 兵隊 鼓手
親衛兵 喇叭手

次の図表5は「職業」の関連語が「パンセ」の何処にあるかを示したものである。番号はBはブランシュヴィック(Lはラフユマ)版。

上段はB版の松浪(1965)訳。中段はB版、その他の前田、由木共訳(1966)。下段はL版(1963)の田辺訳(1980-1984)。三訳とも同じ場合は一行一訳、訳が短い場合は一行に上の順で記す。英語訳は Trotter (1965) による。

図表5 「職業」に関連する語のB、L版における箇所（番号）

B (L)	原文および松浪、前田と由木、田辺訳	英語訳
34 (587)	le métier de poète et celui de brodeur	trade
松浪訳	詩人の職、刺繍工の職	
前田訳	詩人の職業、刺繍師のそれ	
田辺訳	詩人の職、刺繍の職	
97 (634)	le choix du métier 職業の選択	calling
	～ ces métiers (これこれの) 職業(が賞賛され)	
	mépriser tous les autres	
	すべての職業が軽蔑され、それ以外のものはすべて軽蔑され そのほかのすべての職業がけなされる	
	on choisit métiers 職業を(選ぶ)	callings
	toutes les conditions あらゆる身分	conditions
98 (193)	condition 職務、職務、つとめ	condition
	le choix de la condition 職務、職務、身分	condition
	chaque condition 職務、職業、身分	condition
113 (17)	travail 労働、勤労、働いて	work
116 (129)	職業(B版になく第一写本のみ)。(田辺訳注：この一語は、 自筆原稿に欠けている。おそらく製本の際に切断されておと されてしまったものらしい。第一写本によりおぎなう。) 第一写本の原語不明	なし
	vocation 天職、天職、職業	vocation
	最後の職業は代名詞で vocation 天職、職業、それを	
117 (35)	ouvrier 職人	workman
	du choix des conditions 職業選択	conditions
130 (415)	laboureur 労働者	laborer
131 (622)	affaire 仕事	business
137 (478)	occupation 営み、仕事、熱中の仕方	pursuit

138 (879)	de toutes vocations あらゆる職業、同左、さまざまな職業人	callings
139 (136)	charge 地位、(軍) 職、役職	commission
	condition 状態、状態、条件	condition
	condition 身分、身分、地位境遇	condition
	royauté 国王の身分、王位、王の地位	royalty
	poste 地位	position
	les grands emplois 顕職、栄職、顕職	posts
	emplois 職務、職務、つとめ	labor of office
	condition 身分、身分、地位	condition
	occupation 仕事	occupation
	charge 職、職、地位	post
	condition 身分、地位、身分	position
condition 境遇、地位、条件	condition	
143 (139)	charges 職務、職務、仕事	cares
	affaires 仕事	business
	affaires 職務、仕事、雑務	business
158 (37)	métiers 職業	pursuits
194 (427)	occupations 仕事、仕事、つとめ	occupations
	charge 職、地位、職	office
252 (821)	métiers 職人、いろいろな職業、職人	artisans
323 (688)	des charges et des offices 官職や地位、公職や役目、官職や職権	of rank and office
374 (33)	condition 身分、自分の職務、自分の分	mode of life
	代名詞 condition を指す それ、自分の職務、自分の分	
386 (803)	artisans 職人	artisan
799 (303)	artisans 職人	artisan

d. モンテーニュとの比較

パスカルの「パンセ」が、モンテーニュ(堀田 1991-94、原 1994)の「随想録」で最長の「レーモン・スボン^(注1)の弁護」に驚くほど似ていること、この二つの基督教弁証論において、前者が後者に負うところが多いことが度々指摘されてきた(関根訳「随想録」1954)第12章序文解説)。

モンテーニュがその中で展開した「われ何を知るか」という句(「随想録」1954)を、デカルトは「われ思う、故に、われあり」で解いたが、パスカルは「心情」^(注2)で解いたのである。

注1 スボン(Raymond Sebon(d) ?-1436) スペインの神学者、モンテーニュは、この章でスボンの思想を弁護したというより、むしろ彼独特の思想を述べたと云われている。

注2 心情(cœur) : B278「神を直観するのは心情であって、理性ではない。」この言葉は、パスカルが信仰を理性とは全く関係のない感情の問題にしてしまったと誤解されている。これはパスカルの真意に悖る。理性を全く斥け、非合理的直観のうちに閉じこもる限り信仰は笑うべきものとなる。B253「二つの行き過ぎ、理性を排除すること、理性だけしか認めないこと。」理性は自分自身をある限界ないに閉じこめ、心情はこの限界から自分を解き放ち、事実の確信へと入っていく(伊藤 1981)。

前田(1949)はこの二つの基督教弁証論を詳細に比較研究した。そのうち、ここで問題としている「職業」に関しては下記のように「パンセ」のB138が関連していると思われる。その他、仕事、身分、地位、職務、職などに関しては、B131、139、143、194が関連している。一例を示す。

B138 「人間は、屋根屋だろうが何だろうが、あらゆる職業に自然に向いている。向かないのは部屋の中にじっとしていることだけ。」

「スボンの弁護」(同上、関根訳 p.961)においては、

「巴里のノートオル・ダムの塔の上に釣り下げられ鉄の細い網で透いている檻の中に一人の哲学者を入れて見るがよい。彼は明白な理由によって彼が落ちるのは不可能であることを知るであろうが、それにも拘わらず、屋根師の職業に慣れていない限り、この極度の高さを見ることによって恐怖させられない様にはすることは出来ないであろう。」

4. 偶然

パスカルの「偶然性」のために、「偶然」が現れる句を示そう。

B370 「偶然が思想を与え、偶然がそれを奪う。」

B513 「彼がそう言ったのは、偶然である。なぜなら、彼がそれを言う機会が起こらないこともあり得たからである。～してみると、彼は機会があればいつでもそう言わざるを得ないのであって、機会が生じたからそう言ったのではない。一方は必然であるが、他方は偶然である。」

B707 「予言の一致が偶然の結果と思われられないためには、まさにそのことが、予言されていなければならなかった。」

B744 「ユダヤ人の群衆がピラトの前でイエスを非難したとき、いわば偶然に叫んだ『ガリラヤ』という言葉がイエスをヘロデのもとに送る口実をピラトに与えた。～見かけの上では偶然なことが秘儀の成就の原因となった。」

理性主義が主流の近代哲学における理性の前には、偶然や運命の存立する余地はなく、「偶然性」や「運命」といった概念はほとんど問題にされなかった。たとえば、スピノザ(1677)は次のように言っている。

「ある物が偶然と呼ばれるのは、我々の認識に欠陥に関連してのみであって、それ以外のいかなる理由によるものでもない」。

岩波哲学小辞典(1949)では「偶然」を次のように定義している。

「吾人が因果律により予知し得なかった事件の生起を云う。偶然は或事件が法則に支配せられず原因を有しないということの意味するのではなく、寧ろ吾人の知識の不十分を意味する。故に自然科学の理想においては偶然なるものはない。併しこれは勿論自然科学の対象たる自然以外の世界においても自由は成立しないという理由にはならない。」

しかし、近代理性主義の克服が日程にのぼる19世紀初頭から、哲学的思索の主題とされ、たとえば、キルケゴール(1844)は次のように云う。

「現実性のなかに本質的に宿っているところの偶然性というものを論理学がかくまっでやろうとはしないからである。」

このように深刻な問題として考えられてきたが、ある現象が偶然なのか、あるいは必然なのかは決定的解決を得ていない。依然霧の中である

(木田 2001)。

科学における、予測困難な不規則運動であるカオスの発見によって、必然的な法則からでも、場合によっては見かけ上は偶然と思える現象が生じることが分かった(井上 1996)。このカオスの理論がわれわれの心の問題にまで足を踏み入れて来るのだろうか。

パスカルの句に戻り、九鬼(1935)にしたがって

「必然とは～存在が何等かの意味で自己のうちに根拠を有っていることである。偶然とは～存在が自己のうちに十分の根拠を有っていないことである。」

として考えてみると、上の4句のうちB707とB744の「偶然」は、文面から明らかに根拠を神の手におくことによって「必然」となる。しかし、B370とB513の「偶然」は文面だけでは根拠が明確でなく「偶然」のように見えるが、この「偶然」もB707とB744と同様に神ある「偶然」なのである。それを理解するためにはパスカルの「恩寵」の問題を知る必要がある。

この問題について、アウグスティヌス(354-430)とペラギウス(360?-?420)による論争があり、パスカルの1世紀前、理想主義的ヒューマンイズムのエラスムス(1466?-1536)(ホイジンガー1924)と恩寵の絶対性に帰依するルター(1483-1546)の論争は西欧精神史上の壮観であった(金子 2001)。

さらに、印刷術が飛躍的に発展し、17世紀をはさんでアウグスティヌスの全集に直接触れることが容易になり、西方キリスト教が強くアウグスティヌス的性格を帯びてきた。以来、カトリックのなかで2つの傾向が対立することになった(セリエ 2001)。

なお、確率の歴史は、パスカルとフェルマーの往復書簡(1654)に始まる。確率とは、全事象に対する該当事象の割合、すなわち、ある現象の発生に関する確実の度合いであり、「偶然」とは結びつかない。

5. 恩寵、選択

パスカルが信仰するキリスト教の教理によれば、人間が救われるのは神が、その独り子イエス・キリストを人間として世に使わし、十字架による死によって人類の罪を贖わしめた結果であって、全くの恩寵である。問題は如何にしてその恩寵にあずかれるかということである。その際人間の側の自発的な努力にどの程度の意味を認めるかという恩寵と自由意志との関係は教理において最も困難な問題であり、昔から多くの教説、研究がある(森 1974、ミール 1999、森川 2000)。パスカルは「恩寵文書」(1657-58)で、この問題を扱った。ここでは松浪(1965 p.410)の解説にしたがって考えていきたい。

われわれの善きわざの原因を、あるときは神に、あるときはわれわれ自身に帰するこの矛盾はいかに解決されるべきか。ポール・ロワイヤルにおける神学論争に巻き込まれたパスカルは「プロヴァンシャル第18書簡」(1657)で、アウグスチヌスにならって次のように言っている。

「われわれの行為は、それを生み出す自由意志のゆえにわれわれのものであり、しかもわれわれの意志をしてそれを生み出させる恩寵のゆえに神のものである。」

(原文、および原典は参考文献参照)

パスカルによれば、真理は二つの相反する原理、すなわち人間の意志のうえに働く恩寵と、それに抵抗することもできる自由意志との一致のうちに存する。しかし、カルヴィニストとペラギウス派は、二つの原理のいずれか一方に偏したため誤謬におちいった。前者は自由意志を否定し、後者は恩寵を否定する結果になった。聖アウグスチヌスおよび公会議の認めるところによれば、恩寵は人間の意志のうえに働いてこれを自由にかつ有効に同意させるが、人間の意志はそれに対してすら、つねに同意をしないことのできる可能性を有する。神は選ばれた人々に対して持続の意志を与える場合にも、その反対のことを欲しうる可能性を彼らのうちに残しておく(図表6)。

この思想は、「パンセ」の次の句とまさしく一致する。

B524 「人間がつねにさらされている二重の危険、すなわち絶望と傲慢とのゆえに、恩寵を受けることも失うこともできるという人間の二重の可能性を教える教理ほど、人間にふさわしい教理はない。」

キリスト者はつねにかかる二重の可能性を担って生きているのである。

「プロヴァンシャル」の筆者（パスカル）は、この点に関してジャンセニウスの説が決して異端でないことを立証する。聖アウグスティヌスおよび公会議の説をあやまりなく継承するものであるばかりでなく恩寵の有効性とそれに抵抗する自由意志とを調和させるトマス派の学説とも決して矛盾するものではない。

ジャンセニウスは神の意志と人間の意志との関係の問題、つまり人間は自力で救われるのか他力の信仰によらねばならないのかという問題に関して、プロテスタントとはっきり区別することに意を用いて、カトリックの教会内にとどまりながら、ルターやカルヴァンの他力の信仰にもっとも近いところに立ち、もっぱら教父アウグスティヌスの晩年の見解に準拠したのである（野田 1953、支倉 1977）。

このように、パスカルがアウグスティヌスの立場を護るならば、「恩寵」のもとで「職業の選択」行われ「職業の選択は偶然による」ではなく、「職業の選択は恩寵による」と云って良かったのである。異端か。しかし、正統であるという神学者たちでさえも、恩寵と自由意志に関する考え方は多様であり、したがってパスカルの立場を異端と言うことにはならない。本稿で問題としているのは、「正統と異端」（堀米 1964）の問題ではないので次に進もう。

後述するように、父の仕事を助けるための計算機製作、父との大気圧の実験のための職人との接触。それが「恩寵」ではなく「偶然」を使わざるをえなくなったのではないだろうか。父について述べよう。

図表6. 恩寵と自由意志についての考え方の違い

他力尊重			人間の行いの無益を強調
↑ ↓	プロテスタント (カトリックにとって異端)	ルター カルヴァン	徹底して恩恵絶対、予定的恩寵 と禁欲的信仰生活を強調
	カトリックの正統	ジャンセニスト アウグスティヌス トマス・アクイナス ジェスイット	恩寵と自由意志との正統的調和
自力尊重	異端	ペラギウス	自力を重んじるので異端

この図表の作成には前田・由木(1966)における前田の解説を参考にした。

補足解説

反宗教改革のイエズス会は、カルヴァンとは正反対の立場をとり、人間の自由意志の役割を強調する。問題はイエズス会の恩恵説が、果たしてペラギウスの線までずれているかどうかということであって、ヤンセンは、そうだとしたアウグスティヌスの名において非難した。イエズス会の反撃は、自分らは正統の枠内にあり、ジャンセニウスこそ、アウグスティヌスを祖述していると称して実は、カルヴァンの線までのみ出ているとして異端呼ばわりをする。

神の存在と、その絶対的支配を信じれば、自由意志の働きといっても、もともと神の支配下にあるのである以上、真の自力とはいえ、他方人間の自発的な営みを救いと全く無関係と決めると、何をやっても同じという投げやりの結果を起こさせる危険がある。そこで各種各様の色合いを持った教説が現れ、両者の対立関係を調和させようと試みた。

ルター(Martin Luther 1483-1546):ドイツの宗教改革者。救いは行いによらず信仰にのみよると説いた。

カルヴァン(Jean Calvin, 1509-1564):フランスの宗教改革者。聖書をキリスト教信仰と教義の唯一最高の基準とする立場から、教会の制度・儀式だけでなく一般市制と市民の風習・生活を改革し、一種の神権政治を行った。

ヤンセン(ジャンセニウス Cornelis Jansen, 1585-1638):オランダのカトリック神学者、アウグスティヌスの恩寵主義を奉じ、当時のイエズス会の人間主義神学と論争して迫害された。

ジャンセニズム(Jansenism)のポール・ロワイヤル派の立場は、17世紀の中頃ヤンセンの創始した教義でアウグスティヌスの流れを汲み、恩寵や予定救霊の絶対性と自由意志の無力とを説いたが、事態はポール・ロワイヤル側に不利となり、1656年の

1月にはあわや異端と宣告される寸前までに追い込まれた。そのときパスカルが参加することとなる。それが「プロヴァンシャル」書簡である。パスカルの筆戦は、世論を味方にするのに成功したが、権力には抗することが出来ず1713年教皇によって禁止された。

アウグスティヌス (Augustinus 354-430) 初期キリスト教会最大の思想家。その神学の核心は、人間は神の絶対的恩恵によってのみ救われる、教会はその救いの唯一の伝達機関である、歴史は神の国と地の国との戦いである、の三点。

トマス・アクィナス (Thomas Aquinas 1225-74) 中世最大の哲学者としてカトリック哲学の発展に影響が大きく、信仰と理性の調和を説いた。恩寵は自然を破壊せず完成すると考え、自然的理性による神の存在証明を可能とし、その上に啓示神学をたてた。(稲垣良典1979)。

イエズス会：スペインのロヨラが1534年に結成し、40年に教皇の公認を得た修道会。人類救済を志し、また反宗教改革の先頭に立った。日本にも同会士ザビエルらが渡来。

ペラギウス (Pelagius, 360?-?420) ローマに学んだ英国の修道士・神学者；原罪説を否定し自由意志を強調し、後世異端宣言を受けた。

6. 父、エティエンヌ

フランスの17世紀は「ルイ14世(1638-1715)時代」といわれる黄金時代で、政治的にも文化的にもヨーロッパの中心であり、ルネサンスの中心であったイタリア文化も衰退の兆しをみせていた。フランスも前世紀の後半までは、宗教戦争によって疲弊したが、「ルイ13世(1601-43)時代」に枢機卿宰相リシュリュー(1585-1642)によって反王権的貴族やユグノーの反乱を抑え、中央集権制の確立に努め、絶対王制としてのアンシャン・レジームの基礎が固められたのである。

この時代にあって、エティエンヌ(1588-1651)は売官制によって地方官僚となりモンフェラン市租税院副院長(1624-34)の職についたが、その後パリに転居して金利生活者となり、パリ市債の利子引き下げに対する抗議運動に参加してリシュリューの追求を受ける。娘、ジャクリーヌの取りなしで許され、リシュリューによって当時の官僚勢力と対立する性格

をもつ国王親任官として高ノルマンディ地方ルーアン納税区、勅任租税・人頭税徴収官(1639-48)に任命され、ルーアン市の官僚勢力も参加したノルマンディ地方の反租税・反中央権力の暴動を抑圧する側に立った。1648年、フロンドの嵐の直前、マゼランが官僚勢力の抵抗に譲歩して、地方の親任官・総監制度の廃止にともない、父はその官職を失うことになる。このような父親の身分上の変転は、パスカル家が絶対王政確立のために取られた諸政策とそれに抵抗する諸勢力との間に生じた軋轢の真っ只中に位置していたことを示しており、パスカルの政治・社会に関する思想も、パスカル家の社会的位置を反映して、きわめて屈折したものとなった(広田 1977)(図表7)。

エティエンヌの妻アントワネットは1626年に没し、5年後の1631年、エティエンヌは3人の子供を連れてパリに定住した。パリでは知的生活が開花し、あちこちのサロンで社交界の華やかな生活が繰り広げられ、学問好きの人々が、サークルや「学会(アカデミー)」を組織した。

エティエンヌは数学ばかりか音楽の才もあり、ブレーズは音楽的環境の中で育てられ、音楽に関する論文を書いたと言われている。また、繊細な精神を持つと同時に事業の能力にもすぐれていた。当時8歳であったブレーズの教育は、このような環境の中で始まった。父はパリでの生活に見通しがつくと、整然と合理的に組み立てられた方針にしたがって、ただひとりの男の子の教育に全責任を負ってうちこんだ(田辺 1999)。

ブレーズはすべて父の方針によって教育され、学校教育を受けたことはない(ペリエ 1684)。その父によるブレーズの教育は早教育ではなく、全く反対で、子供たちがたやすくやれることだけをやらせ、力に余ることはもちろん、力いっぱいの仕事さえ課さなかった。姉によると、父は「いつも余裕のある勉強をさせること」を第一の原則にしていた。しかし、ブレーズは父の計画を全く破り去り、12才で幾何学を自分のものにしたため、才能を認めた父に連れられてアカデミーに出ることになる(野田 1953)。

図表 7. 父、エティエンヌ・パスカルの経歴

西暦	事 項
1588	平貴族、枢密顧問官、オーヴェルニュ州リオンンの財務局長官であったマルタン・パスカルの子として生まれる。オルレアン大学で法律を学ぶ。
1610	低オーヴェュニュ地方徴税区の税務管理官（御用金や人頭税についての紛争を裁く役目）の地位を入手。
1616	アントワネット・ベゴン(1596-1626)と結婚。
1617	長女アントニア誕生。早世。
1620	次女ジルベルト誕生(-1687)。
1623	ブレーズ・パスカル誕生(-1662)。
1625	三女ジャクリヌ誕生(-1661)。
1626	モンフェラン租税院副院長職（御用金裁判所、御用金に関する事件を裁く法廷の副官）を31,600リーヴルで購入。
	妻アントワネット没、30歳。
1631	パリに移住し、自然科学の研究と子供たちの教育に専念しはじめる。官職からは次第に身を引く。
1633	クレルモンに所有していた家、副院長の職を弟に売り、得た現金はすべてパリの公債の購入にあてた。公債の利子で生活を維持し、余暇の時間のすべてを趣味としての学問研究にふりあて、子女の教育に専心しようとした。エティエンヌの全財産は、現在の貨幣単位にして数百万フランにもなる。
1638	市債利子の大幅削減に反対抗議をする運動に加担。宰相リシュリューの追求を避けてオーヴェルニュへ逃れる。
1639	妹ジャクリヌがリシュリューに父の赦面を乞い許され、高ノルマンディ地方ルーアン納税区、勅任租税・人頭税徴収官に任命される。この地方に反租税の反乱起こる。
1646	デ・シャン兄弟の感化で一家全部回心。トリチェリの実験の追試。
1648	7月、地方総監制度の廃止。
1651	9月24日没。

当時、理性は、すべての人間が平等に生まれながらに持っているとい一般的に受け止められ、合理主義がデカルトの「方法序説」(1637)の冒頭に宣言されている。パスカルの父も、このデカルト流の合理主義思想の流れにくみしていた。この考え方はフランス語の分析と総合に適用され、この幼いときの父の考えがブレーズのなかにも後を引き、「パンセ」の

文体もこの基盤の上に組み上げられたのである。

宗教に関して父は、すべて信仰の対象になる事柄は、理性の対象になることができないということを教えていた。このようにきっぱり分けて考える考え方は、パスカルの青年期を浅薄な懷疑から解放した。人間の理性ではどうしてもたどりつけない奥義が存在することを彼は最初から心に固く納得していたのである（田辺 1999）。

7. 「働く人」パスカル

前述のとおり、パスカルの父は法服貴族であり、1639年、宰相リシュリューによって高ノルマンディ地方ルーアン納税区、勅任租税・人頭税徴収官に任命され、その地域の反租税・反中央権力の暴動を抑える側にあった。その父が農村を廻って煩わしい徴税事務にいそしむかたわらにあって、パスカルは社会的矛盾に苦々しい思いをした。支配者に立ち向かっても圧倒的な力がこれを無惨に抑圧する。パンセの政治論におけるペシミズムはこの時の経験によるものであろう。このときパスカルが抱いた怒りが人間の平等の考えに繋がり、職業、身分に差別はないという結論に到達したのである。

さらに、以下に述べるパスカル自身の若き日に、計算機製作（1642）、トリチェリー実験の追実験（1646）にあたっての機械およびガラス職人との接触があり、それが彼の一生に大きな影響を与えたと思われる。

1642年、パスカルは、父と共に徴税のために各地を旅行し、面倒な金銭勘定の手間をできるだけ省くことができないか考え始めた。

この構想に基づいて設計図を描いたが、これを実際に製作にうつす段階で、さまざまな困難にぶつかった。つまり、理論を現実には活かす技術の提供者、自分の理論を技術の形で一般化する上での協力者を見つけることが必要となった。病弱なパスカル自身が技師、職工の役目をひとりで引き受けることは出来なかったのである。

さいわい、ルーアンには古くから時計などの精密工業にたずさわる職人達が少なくなく、その何人かの協力を得て、器械の部品をそろえることから始められた。彼らはみごとに旋盤やヤスリを使いこなし、パスカルの与えるこまかい指示の通りに部品を切り出してくれた。また、それらを適当に組み合わせて、完成品を仕上げるためには大変な苦労を要し、二年間の悪戦苦闘の末、ついに完成した。さらに、みずから職工の仕事の監督もし、完成までには模型を50台もつくったのである（小松 1966、前田・由木 1966、田辺 1999）。

1646年10月、実験家のプティがルーアンを通りがかり、エティエンヌを訪問し、二人は協力して真空をつくる実験の追試をした。また、パスカルはさまざまな形のガラス管で実験することを思い立つ。しかし、実験に必要な長いガラス管を作ることは容易でないが、当時、ルーアンはヨーロッパでも有数のガラス工業地であったので、実験用具を作らせてみようということになった。しかし、ヨーロッパ有数とはいえ当時の技術水準の低さは大きな障害であった。思い通りの用具を揃えるには、パスカル自身が直接職人たちを指揮し、すでに計算機作成の際に得た技術上の経験を生かして、ルーアンのガラス職人の腕と父の地位と収入とに物を言わせ、実に多種多様な長さや形のガラス管を作らせたのである（前田 1966、伊藤 1981）。

このような職人との出会い、しかも彼らの協力なしには実験器具等の作成が出来なかった経験によって、パスカルは全ての職業が平等であること、人間として差がなく職業が違うだけであることを知ったのである。自然科学者でも技術者でも研究において、評価しきれないくらい技能者の支えを受けていることからパスカルの判断を理解できるであろう。

「パンセ」においては、既に見たように「職業」に関する語が多いし、その中の「靴職人」(B117)に見られる職人の賛美、また英語訳にすると「work」という語が非常に多いことから、如何にパスカルが日常的に

「働くこと」に関心を持っていたかが分かる。それがパスカルのリアリズムの原点なのである。

前述の、アウグスティヌスにならった「プロヴァンシャル」の言葉を思い出してみよう。ただし、ここでは文意を明確にするため私訳を示す。

「われわれの行為は、その行為を生み出すわれわれの自由意志のゆえに、われわれのものである。しかし、われわれの意志をして、その行為を生み出させる神の恩寵のゆえに、その行為は神のものである。」

この言葉の「行為」に「職業の選択」をあてはめると次のようになる。

すなわち、前半から、「われわれの職業の選択という行為は」、環境、習慣、栄誉の魅力などの諸々の条件を考えて「職業選択を生み出すわれわれの自由意志のゆえに、われわれが決めたことである」。後半からは、「しかし、われわれの自由意志をして、その選択を生み出させるのは神の恩寵であるから」、結局、「職業の選択は、神によるのである」。

では、本稿の課題である、何故、パスカルは、「職業の選択」は「恩寵」ではなく「偶然」と書き残したのか。

「われわれが決めた」段階で「必然」であったか。そうではない。われわれの行為について、われわれが判断する限り「偶然」であり、神の恩寵を通して「必然」となる、とパスカルは考える。

パスカルが計算機という物をつくることに喜びと誇りを持っていたかは計算機を完成したばかりのときに、彼が印刷させた「説明書」の文面によく示されている（ペガン1952）ように、パスカルは、計算機の製作、ガラス管の製作で共に働くことを通して、職工（人）たちの支えがなければ彼の目的が果たせなかったことを実感し、その実感がパスカルに「職業には差はなく人間として神の前に平等である」ことを知らしめることとなったのである。その職業のうち何を選ぶかは、動機は何であれ「偶然」となるので、人間の行為として「職業の選択は偶然」であると書き残したと思われる。パスカルの、職工（人）たちを通しての「働く

人」への理解は、職業人はお互いに尊重しあわなければならないこと、さらにすべての人々が愛し合わなくてはならないキリスト教本来の願いに立ち返るのである。

パスカルはほとんど収入もなく、病気のため支出が巨額におよぶ境遇で、他者（森 1971）への実際的な「愛」の形として、死を前に慈善事業に協力し、パリでは乗合馬車の事業に参加して収益を救済資金とした。

このように、たとえ「パンセ」が人間に厳しいものであっても、パスカルの全生涯を通して持ち続けた「他者への愛」をもってすれば統一的に理解でき、それはまた、いろいろな解釈のもとに300年以上も「誰にでも気に入られ（アラン 1934）」読み続けられる理由である。

8. おわりに

われわれは、数学者・物理学者、モラリスト・キリスト者として語り継がれてきたパスカルが、「パンセ」に書き残した「職業選択の偶然性」に関する句を手がかりに、「働く人」の姿をもっていることを読みとった。そして、彼の「偶然」とは「職業に差別はない」ことを意味し、職業に何を選ぼうと人間としては変わらないことを示したものと考えた。

しかし、「職業の選択」に際して「パスカルのものは、パスカルに返す」として、「では、どうすれば良いのか」という現実の問題が解決されたわけではない。ホルンドの「職業選択の理論」で自己を分析して機会を待つか。待っている余裕はあるのか。再び立ちすくみ戸惑うばかりである。モノー(1971)が云うように、生物のもつ「合目的性」は進化の結果として、生物という分子機構がもつことになった属性にすぎなく、宇宙には元来目的はなく、神も存在せずと冷厳に事実を認めてはじめて人類は自らの未来を切りひらく英知と勇気をもてるようになる、のであろうか。「神なき偶然」。これがわれわれの実存なのであろうか。

終わりにあたり、カール・マルクスとセーレン・キルケゴールが若き

日に悩み、決断をし書き残した作文と日記を以下に引用したい。

まず、マルクス(1818-83)には、1835年17歳の時、高等学校卒業試験の作文「職業選択にさいしての一青年の考察」がある(マルクス 1835)。

「神は、人間に最もふさわしい、そして人間が人間自身と社会をよくも高めることができるような立場を社会になかで選ぶことを人間にゆだねた。この選択を真剣に考慮することは、人生行路を歩み始めて、自己の最も重要な事柄を偶然にゆだねようとは思わない青年の第一の義務であることは疑いない。～だから、われわれは、自分が本当にある職業に靈感を感じているのかどうか、内からの声がその職業をよとしているのかどうか、～真剣に調べてみなければならない。しかし、われわれが靈感そのものの源泉を追求する以外に、どうしてこのことを認識することができるであろうか」

また、キルケゴール(1813-55)は、22歳の夏(1835年8月1日)、不安と動揺のただ中で日誌に次のように記した(キルケゴール 1835)。

「私に欠けているのは、…何を私が為すべきかということについて、私自信の気持ちの整理がついていないことなのだ。…大切なのは、私にとって真理であるような真理を見出し、…そのために私が生き、そして死にたいと思うようなイデーを見出すことなのだ。私の実存の最も奥深い根とつながっているもの、…全世界が崩れ落ちようとも、…。骰子は投げられたのだ。私はルビコン河を渡るのだ。この道はきっと私を闘争にみちびくだろう、だが私はへこたれはしないぞ」

ここに述べられたことは、彼らの独創というわけではない。生きることに目覚めた若き日に誰もが経験することである。しかし、彼らの言葉に心を打たれるのは、彼らの言葉に共鳴するところがあるからであるが、その上に彼らが彼らの述べた通りに生きたということである。経済学者、哲学者、革命家としてのマルクス。実存の思想に大きな影響を与えたキルケゴール。二人の晩年は世俗的には恵まれないものであった。しかし、彼らを受け入れようが受け入れまいが、われわれの中に色々な形で生きている。彼らは幸いな人たちである。

謝 辞

本稿「研究ノート」では、「パスカル」に興味を持ち、理解して頂く手がかりのため、多くの文献を参考に解説し、その出典を可能な限り示

したが、煩雑を避けるため省略した部分もあるので了承頂きたい。参考文献の著者たちに感謝申し上げる。

なお、ここで展開した趣旨は、宗像元介先生が職業訓練研究センターの所長でご在任中(1978-83)、兼務主任研究員であった執筆者の一人、村瀬が、1979年9月25日の訓研ゼミで「パスカルのパンセにおける職業」と題して発表し、その後しばしば議論させて頂き発展させたものである。宗像先生および当時の所員の方々にお礼申し上げます。

〈参考文献〉

I パスカル書誌

浅井喬男編「参考文献(パスカル)」『筑摩世界文学大系』19「デカルト・パスカル」付録、筑摩書房 1971.

支倉崇晴編「日本におけるパスカル書誌(1960-1966年)」東京大学教養学部教養学科「教養学科紀要」6(1973) pp.41-50.

支倉崇晴編「日本におけるパスカル書誌(1967-1974年)」東京大学教養学部教養学科「教養学科紀要」7(1974) pp.21-36.

前田陽一・和田誠三郎編「年譜・参考文献」パスカル全集Ⅱ 人文書院 1959 卷末。
増田良二編「ブレーズ・パスカル書誌」カトリック研究 パスカル研究特輯号 東京 カトリック研究社 1940/11・12.

和田誠三郎編「パスカル参考文献補遺」パスカル全集Ⅱ 付録 人文書院 1967.

最近の書誌については

関西学院大学社会学部紀要掲載の森川 甫教授の諸論文、およびM. ルゲルン、M=R.ルゲルン『パスカルの「パンセ」』：弁証論のテーマ(1, 2, 3)
森川 甫・古家曜子訳 関西学院大学社会学部紀要 第84号 pp.221-240、
第89号 pp.203-221、第91号 pp.195-219、2002の書誌を参照されたい。

II パスカルの著作

「パンセ」のフランス語原題は、ポール・ロワイヤル版1669試し刷りの扇によれば、次の通りである。

"Pensées de M. Pascal sur la religion et sur quelques autres sujets, qui ont été trouvées après sa mort parmi ses papiers"

ŒUVRES DE BLAISE PASCAL. par Léon Brunschvicg. Tome XII, XIII, XIV,

Librairie Hachette, Paris, 1925.(松浪訳底本)

Pascal : Pensées Œuvres complètes, préface d' Henri Gouhier de l' Institut, présentation et notes de Louis Lafuma, Aux Editions du Seuil, 1963, pp.493-641 (田辺保訳の底本、L版).

Pascal : Pensées. Texte, de l' édition Brunschvicg, Garnier Frères 1964 (本稿引用フランス語B版).

LES PENSÉES BLAISE PASCAL DANS L'ÉDITION DE 1671は下記HP。

<http://sami.is.free.fr/> から Téléchargez des Oeuvres littéraires、そのなかの Pascal, Blaise、
 ついで Pensées.

Œuvres complètes Texte établi, présenté et annoté par Jacques Chevalier Gallimard 1954.

Les Provinciales Dix-huitième lettre (1657) op. cit. p.888.

"nos actions sont nôtres, à cause du libre arbitre qui les produit ;et qu'elles sont aussi de Dieu, à cause de sa grâce qui fait que notre arbitre les produit." 原典は田辺 保訳「パスカル著作集IV p.241の注」"de gratia et libero arbitrio (恩寵と自由意志について。17章32節：ラテン教父集44・900から)

Écrits sur la grâce(1657-1658). op. cit. pp. 947-1044.

Discours sur les passions de l'amour (1652,1653?). op. cit. pp.615-621.

Trois discours sur la condition des grands(1660). op. cit. pp.536-547.

英訳

Pensées : Thoughts on Religion and Other Subjects by Blaise Pascal.

tr.by William Finlayson Trotter, Washington Square Press, Inc•New York 1965.

Pensees. PENSÉES. by Blaise Pascal.1660. tr. by W.F.Trotter (1871-).

<http://www.ccel.org/> で The Library. Classic. Pascal. Works by Blaise Pascal pensees. Title Page Table of Contents、pensees. all.html で「PENCEES」の text. 検索可能.

1660 Provincial Letters by Blaise Pascal, tr. by Thomas M'Crie (1797-1875) のHP。YAHOO USA に provincial letters を入力。Provincial Letters by Blaise Pascal または、1657 THE PROVINCIAL LETTERS〜。

日本語訳

パスカル 伊吹武彦・渡辺一夫・前田陽一監修「パスカル全集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」人文書院 1959.

パスカル 田辺 保訳「パスカル著作集Ⅰ-VII 別巻2巻」教文館 1980-1984.

パスカル 赤木昭三他編 パスカル全集 メナール版 白水社 1993-.

- パスカル 田辺 保 訳「パンセールイ・ラフェマ版による」新教出版社 1966.
- パスカル 松浪信三郎訳「パンセ」上記全集Ⅲ.および世界の大思想 8 河出書房 1965.
- パスカル 前田陽一・由木 康訳「パンセ」世界の名著24 中央公論社 1966 (底本はB版、第一、第二写本の写真版、トゥルノー、ラフェマ版).
- パスカル (1657) 中村雄二郎訳「プロヴァンシャル」第18書簡 上記全集Ⅱ p.392.
- パスカル (1657-1658) 岳野慶作・安井源治訳「恩寵論」上記全集Ⅱ pp.497-628. 題名はブランシュヴィック等の全集12巻で公刊された15の断片にガジェが与えた書名である。下記 J.ミール (1999 p.124 注1)。
- パスカル (1652, 1653?) 前田陽一訳「愛の情念に関する説」上記全集Ⅰ pp.74-85. これがパスカル自身のものかについて上記全集 p.170に解説。および、下記 J.ミール (1969) p.172参照。
- パスカル (1660) 前田陽一訳「大貴族の身分について」上記全集Ⅰ pp.161-168. この小品の経緯について上記全集 p.139に解説。

Ⅲ パスカルに関連する著作

- Aラン (1934) 片山敏彦訳「文学論」アラン選集第3巻第49,50,51章 創元社 1964 pp.155-164.
- P.ヴァレリー (1924) 中島健三・佐藤正彰訳「ヴァリエテ」所収の一文 白水社 1935 p.149.
- F.ヴォルテール (1734) 中川 信訳「哲学書簡」第25信 パスカル氏の「パンセ」について 世界の名著 29 中央公論社 1970 p.213.
- R.グアルディーニ (1950) 永野藤夫訳「パスカルーキリスト教的意識」創文社 1957 p.15.
- J.シュヴァライエ (1922) 松浪信三郎・安井源治訳「パスカル」パンセ書院 1957.
- A.ベガン (1952) 平岡 昇・安井源治訳「パスカル」白水社 1976 pp.154-156.
- G.ペリエ (1684) 伊吹武彦訳「パスカルの生涯」上記全集Ⅰ pp.9-50.
- J.メナール (1967) 安井源治訳「パスカル」みすず書房 1971.
- J.ミール (1969) 道躰滋穂子訳「パスカルと神学—アウグスティヌス主義の流れのなかで—」晃洋書房 1999.
- M. モンテーニュ (1533-92) Essais de Michel, Seigneur de Montaigne 関根秀雄訳「随想録」第12巻第12章 新潮社文庫 1954. "Que sais je?" については p.851.
- 伊藤勝彦「パスカル」講談社現代新書 1969 p.26. p.212.

- 伊藤勝彦「パスカル」人類の知的遺産34 講談社 1981 p.71.
- 伊藤勝彦「天地有情の哲学」ちくま学芸文庫 2000 p.134.
- 小松撰郎「パスカル」清水書院 1966.
- 小柳公代「パスカルの隠し絵」中公新書 1999.
- 塩川徹也『『パンセ』を読む』岩波書店 2001 p.7, p.10, p.115.
- 田辺 保「パスカルと現代」紀伊国屋新書 1967.
- 田辺 保「パスカル伝」講談社学術文庫 1999.
- 田辺 保「パスカル 痛みとともに生きる」平凡社新書2002 p.199.
- 中村雄二郎「パスカルとその時代」東京大学出版会 1965.
- 野田又夫「パスカル」岩波新書 1953 pp.54～.
- 支倉崇晴「ジャンセニスム」フランス文学講座 第5巻 思想
- 福井芳男 他編 大修館書店 1977 p.210.
- 広田昌義「パスカルとジャンセニスム (一) パスカル」フランス文学講座 第5巻 思想 福井芳男他編 大修館書店 1977 p.185.
- 前田陽一「モンテーニュとパスカルとの基督教弁証論－『レーモン・スポンの弁護』と『パンセー』との比較研究」創元社 1949.
- 前田陽一「パスカルー考える葦の意味するもの」中公新書 1968.
- 前田陽一「パスカル『パンセ』注解 第1」B117 岩波書店 1980.
- 前田陽一「パスカル『パンセ』注解 第2」B374 岩波書店 1985.
- 松浪信三郎「パスカル」日本図書株式会社 1947 pp.239-240.
- 三木 清「パスカルに於ける人間の研究」岩波書店 1926.
- 森 有正「デカルトとパスカル」筑摩書房 1971 pp.419-511.
- 森 有正「原罪の問題」現代日本キリスト教文学全集 18 キリスト教と文学 教文館 1974 pp.57-77.
- 森川 甫「パスカルにおける恩寵論－展開と傾向－」関西学院大学社会学部 紀要 第85号 2000 pp.189-198.
- 森川 甫「パスカルの恩寵論の源泉」同 第86号 2000 pp.169-184.

IV その他

- M.ヴェーバー(1905)大塚久雄訳「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」岩波文庫 1989 p.114.
- S.キルケゴール(1844) 柘田啓三郎訳「不安の概念」世界の名著51 キルケゴール 中央公論社 1979 p.206.
- B. スピノザ(1677) 畠中尚志訳「エチカー倫理学－」上 岩波文庫 1951 p.77.

- P.セリエ (1995) 川上浩嗣訳・森川 甫通訳「17世紀フランス文化における聖
アウグスティヌス」関西学院大学社会学部紀要 第89号 2001 pp.65-77.
- V.-L.ソーニエ (1963) 小林善彦訳「十七世紀フランス文学」文庫クセジュ
白水社 1965 pp.74-89.
- R.デカルト (1637) 落合太郎訳「方法序説」岩波文庫 1953 p.41.
- J.ホイジンガ (英語版1924 F.Hopman、オランダ語版1925) 宮崎信彦訳
「エラスムスー宗教改革の時代」筑摩叢書49 1965 または、ちくま学芸文
庫 2001 pp.265-278.
- J. L.ホランド (1985) 渡辺三枝子・松本純平・館 暁夫訳「職業選択の理論」
雇用問題研究会 1990.
- K.マルクス (1835) 服部文男訳「職業選択にさいしての一青年の考察」マル
クス・エンゲルス全集 第40巻 大月書店 1975 pp.515-519.
- J. L. モノー (1971) 渡辺 格・村上光彦訳「偶然と必然」現代生物学の思想的
な 問いかけーみすず書房 1972.
- 飯島宗享編「キルケゴール」世界の思想家 15 平凡社 1976 p.125.
- 稲垣良典「トマス・アクイナス」人類の知的遺産20 講談社 1979
- 井上政義「やさしくわかるカオスと複雑系の科学」日本実業出版社 1996.
- 内田魯庵 (青空文庫 <http://www.aozora.gr.jp/>)
定本の親本：内田魯庵全集第6巻 内田魯庵 ゆまに書房 1984.
- 金子晴勇「宗教改革の精神ールターとエラスムスの思想対決」講談社学術文
庫 2001.
- 木田 元「偶然性と運命」岩波新書 2001 p.203.
- 九鬼周造「偶然性の問題」岩波書店 1935 p.1.
- 田中萬年「生きること・働くこと・学ぶこと」技術と人間 2002.
- 長山靖生「若者はなぜ『決められない』か」ちくま新書 2003.
- 羽入辰郎「マックス・ヴェーバーの犯罪」ミネルヴァ書房 2002.
- 原 二郎「モンテーニュ『エッセー』の魅力」岩波新書評伝選 1994
- 堀田善衛「ミシェル城館の人 三部作」集英社 1991-1994.
- 堀米庸三「正統と異端」中公新書 1964.
- 松浪信三郎「実存主義」岩波新書 1962.

(むらせ つ と む 職業能力開発総合大学校 名誉教授)

(たなか かずとし 職業能力開発総合大学校 指導学科)